

類聚文芸考

——新猿樂記とその周辺——

山内益次郎

類聚文芸の中で最も代表的なものは清少納言の枕草子であるが、枕草子以前にもそれ以後にも類聚的なものは多く見られる。類聚文芸はその内容や形式によって種々の分類ができるが、枕草子のような和文的類聚に対して漢文的類聚という分類も可能であり、それは性格的にも夫々異った面がある。新猿樂記もその一であって、枕草子と余り時代的には隔っていない十一世紀頃に書かれた特異な類聚文芸である。

漢文的類聚は仏典に多く見られる。例えば阿含經十二因縁の中に六識身（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）を挙げ又四無色蘊（受蘊・想蘊・行蘊・識蘊）を類聚している如きそれである。この外華嚴經には菩薩名の類聚があり、大日經には金剛大士の類聚があるが、此のような例は枚挙に遑がない。又唐代には義山雜纂があり、後代にも統、二統、三統と雜纂を模したものが書かれたし、此の外中国には種々の類聚が書かれている。

国文学では、祝詞、記紀、万葉等に類聚の萌芽が見られ、和文的類聚としては枕草子に大成されたが、一方に於ては梁塵秘抄に於ける歌謡の類聚の系統があり、又道行も類聚の一系統である。漢

文で書かれた玉造小町子壯衰記や十列は十一世紀前後に現われ、此等の作品と共に新猿樂記は漢文的類聚の淵源と考えられる。此の漢文的類聚は更に庭訓往来、尺素往来等の往来物、桂川地蔵縁起のような縁起ものに引き継がれている。

新猿樂記は巻頭に右京大夫明衡と書かれて居り、藤原明衡（八九一〇六）晩年の作とされている。屋代弘賢は内容が淫猥であるという点で、明衡の作ではないと主張したが、猥雑な点を別にする、明衡の他作品と共通する面が多く見られる。例えば新猿樂記の中に著名文人として、以言・匡衡・文時・直幹を挙げているが、明衡撰の本朝文粹でも之等の詩人の詩は非常に多く、匡衡（四四）・文時（三九）・以言（二六）・直幹（二）を採録している、又、明衡往来は彼の消息文を集録したものであると言われているが、その中には語句上の類似が多い。例えば

猥表三種々芸。横笛内驪太之横笛。琵琶禪師之琵琶。黒長丸之傀儡。白藤太猿楽。如此之輩不可勝計。（中略）
都人士女之見者莫不三解頤断腸

傍線の箇所は新猿樂記にも出ている語句であるが、此の外、人

丸・赤人・小町・古今・拾遺抄等の固有名詞を始めその他にも両者に共通な語句が相当多く挙げられる。

新猿楽記という書名の由来については、新しい猿楽記の意味と、新猿楽の記録の意味と二つの場合が考えられる。平安時代に於て、新猿楽記以前に猿楽の記録として書かれたものとしては、先ず純日本紀に

延暦元年七月壬辰……麩餅戸、散染戸。とあり、又三代実録にも

元慶四年七月廿九日辛巳晦……散染。雜伎各尽其能、……左近衛内藏富繼、長尾米繼伎善散染、令人大咲、所謂鳥瀦人近之とあり、この外禁秘御抄・令集解等にも猿楽の記録がある。就中、本朝文粹（明衡撰）にある村上天皇の散染策問には詳しい記事がある。（後述）これらの旧記に対し新しい猿楽記と称した事が先ず考えられる。

又、新猿楽記についての記録という考え方に立った意見には、日本文学史中世篇（久松義一氏編）の説がある。即ち、当時は散染（猿楽）・田楽・咒師猿楽等があり、散染は主として曲芸奇術の類を演じ、田楽は歌舞を中心とし、咒師猿楽は祈禱の意味をシウウの形式で演じるものであった。ところが十一世紀に至って、猿楽には滑稽な茶番の喜劇を加えて演劇的となり、これが明衡の新猿楽記の名に見える如く、新猿楽と呼ばれたものと思われるというのが、この説の概略である。しかし他にも果して新猿楽という語があるか否かを審らかにしないので、此の説が妥当であるかどうかは定めない。新猿楽記の中にも田楽や、咒師猿楽や、其の他侏儒舞・

品玉・輪鼓等の曲芸があり、田楽記の中にも猿楽や曲芸の記録がある所をみると、当時はまだ厳密な区別や定義はなく、これらの喜劇的所作も、歌舞も、奇術曲芸もひっきりぬめて猿楽と称していたのであらうと推察される。

当時猿楽言と言うのは断腸解頤の意味に使用されていた事は枕草子にも例があるが、人を笑わせるには猥雑なことばや所作も一つの大きな要素となっていた。例えば宇治拾遺物語には

行綱まことにさむげなるけしきをして、膝をももまでかきあげてほそはぎをいだして、わななきさむげなる声にて、「よりによりによの更で、さらにさらにさむぎに、ふりちうぶぐりを、ありちうあぶらん。」と云て、庭火を十まはりばかりはしりまはりたるに、上より下ざまにいたるまで、大かたどよみたりける。

とあるが、このような例は前に述べた明衡の雲州消息にも実景描写として書かれている。新猿楽記には所々に極めて猥雑な個所があるが、このような内容を含むという意味でも新しい趣向を盛った猿楽言の記録として新猿楽記と名づけられたとも考えられる。正面きって儒教的見地から真面目に倫理道德を説く書ではなくて、たわむれに猿楽言を書いたものであるという作者の卑下が感じられる。事実、猿楽そのものについての記述は最初の方だけであって、全文の一割にも足りない。文章の大部分は猿楽を見物していた左衛門尉一家についての叙述である。作者の眼に猿楽として映じたのは曲芸や演芸ではなくて、寧ろ此の世に生きている種々様々の人間の性格や生き方であった。この人生猿楽こそわざわ

ざ舞台上演じられてゐるものより更に滑稽で、笑止千万な観物である。こんな皮肉で諷刺的な意図が感じられるのである。新猿楽記という書名はむしろこのように解すべきものではないかと思われる。

新猿楽記の内容的特質として先ず挙げられるのはその庶民的性格である。平安中期の宮廷文学全盛時代に、このような一般庶民の生活に目をつけた事だけでも稀有の事である。文章は劇的發展も小説的描写もないが、王朝貴族以外の人物が主要登場人物として、誇張され、戯画化されてはいるが、その生活状態がともかく描かれている。勿論、源氏物語や枕草子の中にも、ごく一部には庶民生活が描かれている。しかし作品全体から見るとその比重はとるに足りない程度である。しかるに新猿楽記の場合は記述の大部分は庶民についてのものである。左衛門尉という官職が既にとるに足らない小貴族の末輩に過ぎないが、その妻三人、娘十六人それらの女婿十四人、息子九人合せて四十数人中、僅に上層階級に属する者四人（学者・医師・歌人・僧）だけで、他は農耕者・鍛冶・大工・商人又は博徒・相撲取・遊女等の如く殆んど庶民である。

当時の文学でこのように庶民を取扱つたものは余り見受けられないが、明衡及びその前後の文人たちの漢詩集である本朝無題詩集（群書如從所載）には、傀儡子を賦したもの七篇（藤原忠通・同実光・同基俊・同敦光・同茂明・中原広俊・大江匡房）があり、又漁夫を詠んだもの三篇（藤原通憲・同周光・同敦光）、見売物女（藤原忠通）、見売炭婦（三宮）等が見られる。一例を挙げると

見売炭婦

三宮

売炭婦人今聞取

家郷遙在二大原山一

衣單路嶮伴二嵐出

日暮天寒向二月還

白雲高レ声窮巷裡

秋風増レ価破村間

土宜自レ本重二丁壮一

最憐此時見二首班一

の如くであるが、これらの作は謂わば堂上貴族が行きすがりに眺めた庶民の姿を詠じたに過ぎない。これに比べると新猿楽記の文は表面滑稽を装って居ながら、庶民の姿が如実に描かれている。

七御許者食飲愛酒女也。……件夫字越方部津五郎。名津守持行云云。東馳二大津三津。西走二淀波山崎。雖二牛頭爛。一日

無レ休。雖二馬背穿。片時不レ怠。常論二駄賃之多少一。鎮諍二車

力之不足一。等閑而不レ屈レ腰。蔑如而不レ斂レ紐。足無二脱二糞履

之時二手無二捨二楮鞭二之日。題鞍如二山城茄子相二霜。脰塚如二

大和瓜向日。只以二牛馬之血肉。將二脇二妻子之身命二而已。

明衡がこのような庶民觀察の眼を開いたのは彼が地方官として赴任し、民情を審に知悉しようと努力した為であらう。

内容的特質の第二としては時代相の描写が挙げられる。雲州消息で当時の猿楽や田楽等の目に余る乱行・醜態を嘆いた著者は、新猿楽記では更に範圍を拡げて時代の腐敗・頹廢を描いている。しかもその描き方は、雲州消息のように正面からあげつらう事をせず、寧ろ戲画的に誇張したり、諷刺したりして、より痛烈な警世の意を寓しようとしている。

四郎君受領郎等。刺史執鞭之図也。……但民不レ弊濟二公事。

君無レ損自有レ利。上レ上也。仍得二万民追從。宅常擔二集諸國

土産。則甚豊也。所謂阿波絹。越前綿。美濃八丈。常陸綾。紀伊國縑。甲斐斑布。石見袖。。(中略)如此贅菓子種々。繼種。濟濟成市云云。故除目之朝。不云親疎。先被二尋來者也。

當時の受領がどんなに苛斂誅求を取って、私欲を貪り、私腹を肥していかかは、史伝や説話として多く伝えられているが、ここに挙げたものも誇張されてはいても、全く根のない作り話ではなかったであろう。この外風儀の乱れ、遊女の生悪、博徒、「重利不_レ知_二妻子_一。博_レ殖成_二金_一。以_レ言誑_二他人_一」商人の横行等漸く撰閣政治が乱れようとする前夜の世相の一端が描かれている。

彼の儒者としての正義感はこちらの浅ましい人間性や世相を見せつけられて、黙って居れなかつたのであろう。篇中至る所に見られる滑稽な表現も猥雑な語句も、彼の世を憤り、人間性の醜悪さに痛憤する怒りから発したものと見えよう。

内容的特質の第三として、啓蒙性が挙げられる。枕草子の類聚にも智的啓蒙的な面が見られるが、新猿楽記はその性格が更に著しい。これは作者の該博な智識・永い生涯に蓄積された世間智の結晶と思われている。最初に猿楽の演技種目や名人を挙げるのに始まり、文物・遊芸・職業・物産・食料品・織物・武器・病名・楽曲等について、数多くの名詞を類聚している。これらの物集めの傾向は支那の文選の類や源順の和名抄の影響を多分に受けているようである。しかし、和名抄のように所謂字彙的類聚に比べると流石により文芸的である。例えば諸國の産物が類聚されているが、延喜式に見られるように、物産をすべて掲げるのでなく、一

國一品を挙げ、しかもその産物が他の國と重複しないようになっている。しかも単なる産物の羅列でなく、類語や対句表現に意を用いている。前に挙げたように、阿波絹から石見袖までの七つの物産はすべて織物としての類語的叙述であるが、次いで但馬紙と淡路墨、出雲篋と讃岐田座、上総鞆には武蔵鎧、長門牛には陸奥駒、信濃梨子には丹波栗のように対句的表現になっている所もある。之等の物産は延喜式の記事と合うものが多い。例えば越前綿、美濃長絹、但馬紙、伊予砥、讃岐田座、備後鉄、長門牛、丹波栗、近江鮎、越後漆、周防鱒、隱岐鮫、丹後海藻等そうである。これらの物産の中には、三代実録、毛吹草、和漢三才図会、庭訓往来等にも載っているものもあって、決して根拠のないいい加減なものでもない事がわかる。作者が単なる道学者ではなく、地理経済にも明かかった証左である。

新猿楽記の中には種々の人物が出てくるが過去の人名については実名のもが多く、当代の人物には多く仮名を使い、又フィクションとして用いたものにはたわむれに創った戯名とも言うべき名がある。例えば医師の和氣明治は当時の二大医家である和氣氏を姓として丹波忠明(一〇〇〇年頃の人)を合せたものと思われ、陰陽師加茂道世は賀茂保憲の子光栄の仮名、歌人柿本恒之は柿本人麻呂と紀貫之からとったものであろう。戯名としては農耕人である田中益豊(田の中が益々豊かになる)。鍛冶の金集百成(金を集めて多くの物を作る)。相撲人の伊賀枯丸(からまりつく)、大工の檜前杉光、大原に住み、「十指黒両鬢白」という山口炭武等が挙げられる。

新猿樂記の類聚語句を字彙と比較してみると和名抄、類聚名義抄との類似が多い。例えば新猿樂記に宿直裝束（烏帽子、狩衣、袴等三十一語、昼裝束（冠、袍等十二語、合計二十三語が類聚されているが此の中十八語は和名抄と共通している。しかし、新猿樂記の類聚はこのように辭書的なものだけでなく、奇抜な常人の意表をつくものも含んでいる。例えば曲芸の種類、博打の手、食物、美人の条件、醜女の要素、諸国の名産等は和名抄、類聚名義抄の如き過去の字彙にもなく、現在の辭書大言海、言泉等にも殆んど収録されていない。例えば相撲の手として新猿樂記には
六夫君高名相撲人也。（中略）内搦、外搦、互繫、小頸、小脇、逆手等上手也。

とあるが、これらの相撲の手は後世の所謂四十八手等として文獻に述べられているものには殆んど見えず、ただ源平盛衰記・長秋記・異本曾我物語に見えるだけである。

新猿樂記の類聚の中で、他にない大きな特質は性格的特徴を羅列的に述べている点である。主人公の左衛門尉については一言も述べていないが、「所謂妻三人、娘十六人、男八人」及び娘婿等四十数人は「各各善惡相頌、一一所能不同」である。

第一の本妻は年齢六十にして尚回春の法に汲汲としている「好色甚盛矣」という性格であるが、その老醜を述べるに当っては

見首髮 蟠蟠如朝霜。向三面皺 疊疊如暮波。上下齒欠落若
飼援頰。左右乳下垂似夏牛鬣。

となり、又回春の法の列挙に当っては

故本尊聖天供如無驗。持物道祖祭似少庇。野干坂伊賀專

之男祭。叩三袍吉本一舞。稻荷山阿小町の愛法。顛顛破前喜。
五条道祖奉三菜餅千葉手。東寺夜叉祀一飯飯百羅子。叩三千社。
躍捧二百幣一走。

となり、その感情の表現の状は

嫉妬臉如三毒蛇之繞亂。忿怒面似惡鬼之瞋。恋慕之淚洗
面上粉。愁歎之炎焦三肝中朱。

此の本妻の惡妻振りに対し、次の妻は家庭的な賢婦人型であり、第三の妻は娼婦型として典型的である事が、前述のような性格類聚によって描かれている。このような性格描写は一応家族全部三十数名について為されているが、此の場合の類聚は「もののはの類聚」よりも寧ろ「なるもののはの類聚」に近くなっている。その一例として醜女の条件として挙げられているものを挙げると

十三娘者中之糟糠也。醜陋不可見人。頑鄙不可仕主。
其為體。（以下漢文体であるがながの關係片、かな文字で示す）

蓬頭、頰短し。あひくち。あご長し。耳たり、かまち太し。高つら。すいつら（頰窄）。齒分れ、舌つき。鼻ひら。はなひせ（鼻鼻）。くぐまり（鼻便）。鳩胸。腹太し。蛙腹。傍行。わに脚。疥癩。なます肌。首短くして衣の襟余りあり。たけたくして裾足らず。身に狐臭あり。衣に蟻虱集まる。手は鉄鍼の如し。足は鉄杖の如し。粉を施せば狐の面に似たり。經を著れば猶猿の尻の如し。（以下略）

この位条件が揃うと申し分はない。清少納言が「みにくきもの」として類聚しても此以上には出なかつたのであろう。

勿論、新猿樂記にあるような貴賤を混え、貧富様々で、美醜賢愚とりどりの家族が平安朝の昔であっても、現実存在していたわけではない。しかし、どのタイプも当時でも成は現在でも社会の中に見られそうなタイプである。ここに挙げられた性格は如何にも典型的であり、又概念的で、誇張され、戯画化されている。しかし作者は恐らく人生の一大活画を描こうとしたものであって、その意図に於いてはフランスのバルザックの人間喜劇とも比較できよう。

明衡が漢文学の大家であった事は一面においては新興かな文学に対する認識を弱める結果を招いたようである。彼は新猿樂記で、紀伝、明法、明経、算道を挙げ以言、匡衡等の漢学者を類聚し、又医道、陰陽道についても述べている。流石に和歌には関心を示し、人麻呂・赤人や六歌仙の名を挙げ、又万葉集、古今集、拾遺抄等の歌集も類聚している。しかし、竹取・宇津保・源氏物語や、土佐日記・蜻蛉日記及び枕草子等には全く触れず、女性文学者としては僅かに歌人としての衣通姫と小野小町が数えられているだけで、清少納言も、紫式部も全然問題とされず、その仮名さえ見当らない。従って枕草子の影響と思われる点は殆んどないと言つてよい。この事は枕草子のような和文的類聚とは異なる漢文的類聚が別箇の系脈として発達して来たことを示している。

新猿樂記の書名と関係あるものとして、前にも散策策問や洛陽田楽記を挙げたが、漢文的類聚として、その周辺にあるものについて考えてみたい。その一つとして十列や拾烈集の類聚がある。十列等が書かれた年代は不明であるが、源氏物語に引用されてい

ると思われるふしがあり、新猿樂記の書かれた頃は今の形そのままではないにしても、既に此のような種類の類聚が行われていたと思われる。新猿樂記と十列との共通語句の一例には、
客前猿樂、高名咒師、相撲、競馬、仏教婦依、念仏三昧、大名僧、驗者守護、上手和歌（○點は共通語以下同じ）
等が発見されるが、この外にも共通語、類句は多く数えられる。就中十列曆（二中曆所収）の最初の、冷物（すさまじきもの）の類聚中にある

十二月々夜、老女仮借、無興散策（一）、女醉、胡瓜老、昆備八仙舞

は殆んどそのままの語句で新猿樂記の中にも採り入れられている。即ち「十二月月夜」については

雖_レ致_二氣裝_一。敢無_二愛人_一。宛如_二極寒之月夜_一。

とあり、群書類従本には最後の句に「シハス」とかながついているが、此の句は河海抄で、「清少納言十列」云云とある事から、清少納言が漢文類聚を作ったか否かについて、今までも論考されたところである。（此の点については、殆んど他に枕草子の影響と思われる語句がない新猿樂記に、同様の語句文章がある事からしても、「十二月々夜」云云が清少納言の創作でなく、当時の慣用の辭の如きものであつた事が分かる。）

又、「老女仮借」については新猿樂記では

第一本妻者、齡既六十……雖_レ致_二氣裝_一

となつて居り、「女醉」、「胡瓜老」は

七御許者食飲愛酒女也……胡瓜黃。

とあり、「昆備八仙舞」は

九郎小童者、為^レ雅楽寮人養子……胡飲酒、
崑崙八仙……

となつていて、十列の第一列類聚語句十語中、六語が新猿樂記に採られていて、兩者の密接な關係を示している。

玉造小町子壯衰記は古来空海又は三善清行の作とする説があるが、一説には更に時代が降り、源信僧都の往生要集が書かれた頃から普及したと思われるので、後一条・後朱雀・後冷泉帝の間に、仏家の手によつて書かれたものであるとも言われている。此の書も新猿樂記と同じく、物語の結構の中に類聚を含んでゐる。それらの事物が新猿樂記と一致するものに、鸞鏡、蟬翼、羅綾、蘭麝、琥珀、瑪瑙、青黛、燕紫等多くあるが、特に類聚の方法に共通点が見られる。即ち、容姿の醜怪さを述べるのに、頭髮、齒、脚等について述べ、逆にその美麗さの叙述に、鏡、肩、釵、白粉、紅、腕、腰支、衣服等について述べるものも同様である。又富貴を表わすのに虎珀、瑪瑙、麝香等の珍宝を挙げ、衣服、家屋、飲食物を次々と類聚するのも同じ筆法である。特に兩者発想が似ている文としては、壯衰記に

不^レ奈^ニ楊貴妃之花眼。不^レ屑^ニ李夫人之運踵^一。
とあるのが、新猿樂記では、
昔唐玄宗之代、必^レ爲^レ媚^ニ楊貴妃^一。漢武帝時、自然^レ替^ニ李夫^一人^一乎。

となつてゐる。又壯衰記では

東門五色之瓜。西窓七班之茄。燉煌八子之椽。煖煖五孫之李。大谷張公之梨。広陵曾王之杏。東王父之仙桂。西王母

之神桃。魏南牛乳之楸。趙北鷄心之棗。泰山花岳之乾柿。勝丘玉阜之節栗（以下略）

と支那の名産を対句的に並べているのに対し、新猿樂記では、

信濃梨子。丹波栗。尾張糰。若狹椎子。……

山城茄子。大和瓜。飛彈餅。鎮西米。

と日本の名産を以て換骨奪胎した感がある。壯衰記でも新猿樂記でも対句的表現が多く、例えば前者では

鶯囀三春之始、早蕪雪梅於幌帳之下。

鹿啼九秋之終、晚賞露菊於簾簾之中。

の如きであるが、後者では

雖^レ致^ニ氣裝^一、敢無^ニ愛人^一。宛如^ニ極寒之月夜^一。

雖^レ爲^ニ媚親^一、更多^ニ厭者^一。猶若^ニ盛熱之陽炎^一。

となつてゐる。この外にも兩者何れも漢文体の文章でありながら、ふりがなによつて和訓的な読み方をしてゐる点もよく似てゐる。壯衰記の一節をふりがな通りに書き下し文に直してみると、かういふ感じがし、すがたはやせたり。頭に霜蓬の如く、膚は凍れる梨に似たり。骨そはだち筋あがつて、面黒く齒きばめなり。はだかにして衣無く、はだしにしてはきものなし。容貌頓頓、身体疲瘦、頭如霜蓬、膚似凍梨、骨疎筋抗、面黒齒黃、裸形無衣、徒跣無履。

これを、前記の新猿樂記「十三娘」の容姿の叙述と対照してみると

あせくちにして、おとがひ長し。みみたりにして、かまち太し。たかつらにして、すいつらなり。齒わかれ、したつきな

り。はなひらにして、鼻ひせなり。くぐまりて鳩胸なり。腹太くしてかへる腹なり。

厭膺頤長、顴耳聾太、顴高頰窄、歴齒灑灑、膈勝塞鼻、僂僂鳩胸、腫脹蛙腹。

此の両文は原文も書き下し文も、形式内容共に傾向がよく似て居り、後世の軍記物のような和漢混淆文を思わせる。玉造小町子壮衰記は前にも述べたように著作年代ははっきりしないが、新猿染記より早い事は間ちがないので、恐らく新猿染記の方が壮衰記に影響されていると思われる。新猿染記に平安朝の女性としてただ一人小野小町が登場しているが、此の事も壮衰記の影響と思われる。

次に、新猿染記と関連が深いのは、本朝文粹に明衡自身撰んでいる村上天皇の散策策問と、それに答えた藤原雅材作の対策である。

弁散策一

邑上御装

問。散策之興。其来尚矣。俳優入_レ簪。還当_二断_一足之刑。烏澹来朝。自為_二解_一頤之觀。仰尋_二前日_一之伎歌。俯察_二当今_一之風俗。不_レ聞_二周礼_一旃人之所_レ學。亦殊_二漢典_一遠夷之所_レ獻。船太之新秣藕。人為_二美談_一。魚丸之世羅国世称_二妙舞_一。未_レ審揭_レ鞭騎_二半莖_一。指_二何方_一而逃去。傍_レ柱負_二胡鏡_一。為_二誰人_一而裝備。安勒氏之臨_レ老。相撲難_レ弁_二其師_一伝。吏部王之惟新。傀儡欲_レ聞_二其秘術_一。随_二月次_一而變_レ体。拾遺之説為_二真偽_一。憑_二円座_一而放_レ光亞將之談_二非_一毀_レ非_レ毀_レ。

此の中には烏澹・解頤・相撲・傀儡等新猿染記と共通語句が多

く、明衡撰の本朝文粹に撰録されている点等から新猿染記の先蹤となつた事が考えられる。新猿染記より後に書かれた大江匡房の洛陽田染記は更に詳細である。

永長元年之夏。洛陽大有_二田染之事_一。不知_二其所_一起。初自_二閭里_一。及_二於公卿_一。高足一足。腰鼓振鼓。銅鼓子編木、殖女眷女之類。日夜無_レ絶。……其裝束_レ盡_レ善_レ美。如_レ影如_レ珠。以_二錦繡_一為_レ衣。以_二金銀_一為_レ飾。……入_レ夜參_レ院。鼓舞跳梁。摺染成_レ文之衣袴。法令所_レ禁。而檢非違使又供_二奉田染_一。皆著_二褶衣_一。白日渡_レ道。……權中納言基忠卿。捧_二九尺高扇_一。通俊卿兩脚著_二平闕笠_一。參議宗通卿著_二藥尻切_一。何況侍臣裝束。推而何_レ知。或裸形腰卷_二紅衣_一。或放_レ髻頂戴_二田笠_一。六条三條。往復幾地。路起_二埃塵_一。遮_二人車_一。近代奇怪之事。何以尚_レ之。

此の文も新猿染記と共通点が多く、又形式的にも類聚的であり、内容的には当時の実景実状を描いて、新猿染記の文が決して全くの虚妄や誇張でない事を裏書している。猿染や田染を見物するだけでは飽き足りなくて、遂に自らも嗚呼の仕草を演じ、公卿までもが異形の粉装をして都大路を練り歩き、院にまで闖入するとは全く呆れた光景である。

新猿染記と関係の深い明衡往来が後の往来物の祖となつて、東山往来、十二月往来、尺素往来、雜筆往来等多くの往来物を生んだがその中でも庭訓往来は新猿染記に拠つたと思われる語句がある。即ち諸国の名産類聚中、

伊予簾 讚岐円座 上総鞆 武藏鏡 能登釜 河内鍋

等は阿書全く同一であり、新猿楽記の

美濃八丈 尾張櫃 信濃梨子 常陸鞍
は、庭訓往来では、

美濃上品 尾張八丈 信濃布 常陸袖
となつてゐる。

尚、明衡作と伝えられるものに「清水寺縁起」があるが、同じ縁起として応永年間（十四世紀）に書かれた「桂川地藏縁起」も類聚文芸としては出色のもので、これには始めに新猿楽記と同じく西宮の縁日に集つた衆生の様子を述べ、次いで舞楽、名所、織物、武具、飲食物、書家、菜種等について類聚してゐる。

このように明衡は、本来類聚物ではない縁起、往来物を書いたのに、後世の縁起、往来物に類聚的なものが多いのは、明衡の名による混同が行われたのであろう。これは彼の著作が後世まで広く読まれ、同時にそれだけ大きな影響力を持っていた事をしめすものである。

又後世猿楽や田楽の記録は、新猿楽記が一つのサンプルになつたようである。実意大僧正の「文安田楽能記」には

貴賤群集之毎に能尽感声。万歳之美談只驚耳目云云
等の文があるが全く新猿楽記ばりである。又「私河原勸進猿楽日記」「粟田口猿楽記」等もその題名、文章共に新猿楽記を頭に入れて書かれたと思われる点がある。

新猿楽記はこのように漢文的類句として多くの追隨者を生んだが、和文の方面にも影響を及ぼしている。例えば源平盛衰記に名虎ハ松ノ立ルガ如クシテフンハダカツテ動ザリケルヲ、能

雄ハ藤ノ纏ガ如クシテ、身ニ縷付ツツ、小頸、小脇ヲ僅詰テ
内揃、外揃、大渡懸、小渡懸、弓手ニ廻、妻手ニ廻シテ、逆
手ニ入様々ニコソモミタリケレ

とあるが、この相撲の手は新猿楽記と全く同一語句をしかも同数挙げてゐる。此の文は前述のふりがなつき書下し文と口調が非常に似て居り、両者には内容形式共に深い繋がりがあると思われる。異本曾我物語にもこの文と類似語句があり、又「盛衰記」と「壮衰記」の書名等からも、新猿楽記、玉造小町子壮衰記等と軍記物語類とは何等かの連繋があるようである。

要するに新猿楽記は、枕草子と数十年の隔たりしかない時期に書かれたが、全く異質の類聚文芸である。これは作者が当時の女流文芸に触れる機会がなかつた為か、或は寧ろそれを無視した為か分らない。新猿楽記は枕草子のような洗練された美しさが無く、平板で羅列的、概念的のそしりを免れない。情緒性においても変化性、美学的根拠においても枕草子に及ばない。しかし庶民性に立脚し、該博な知識と言語を駆使して、軽妙に、辛辣に、諷刺さえ加えて描かれ、当時の時代相の断面を描いた人生絵巻として仲々興味のある作品であると言えよう。

☆

☆

☆

☆